

稲作情報

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

No.2

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

適期田植えで、初期生育の確保を！

1 播種後の温度経過と今後の気象予報

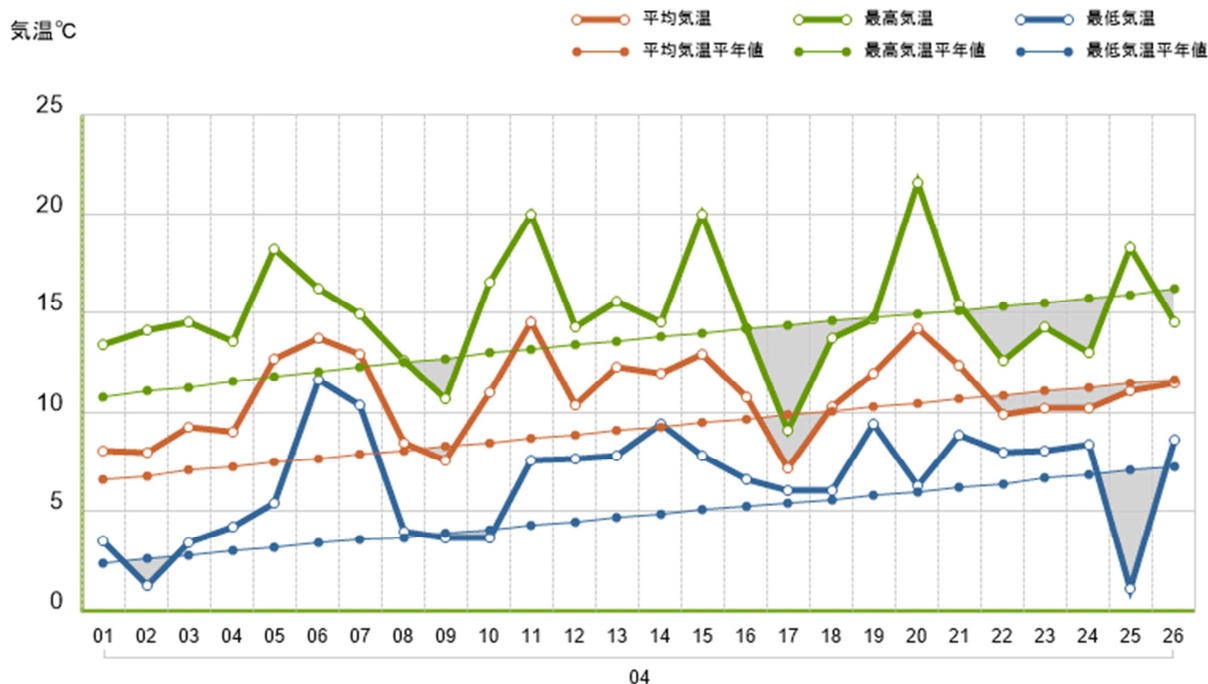


図1 気温の経過と平年値 (アメダス秋田、気象庁 HP 資料より作成)

秋田地域振興局管内の播種作業は4月16日に盛期を迎えました(平年4月16日)。耕起作業は、4月2半旬にまとまった降水量がありましたが、概ね平年並に進んでいます。4月1半旬～2半旬にかけては気温は高く推移しましたが、3半旬以降は気温の低い日があるなど、気温の変化が大きくなりました。

仙台管区气象台から4月27日発表された東北地方の1か月予報によると、向こう1か月の気温は高い予報です。特に、期間の前半(4/29～5/5)は気温がかなり高くなる見込みですので、育苗ハウス内の温度管理には十分注意してください。

2 苗を老化させない育苗管理を徹底

【育苗期後半の温度管理】

苗の生育に合わせて、徐々にハウス内の温度を低く設定します。生育時期別の温度管理の目安は右の図を参考にしてください。

2.5葉期以降は、特に寒い日で無い限り夜間もハウスを解放し、徐々に外気温に慣れさせます。ハウスの換気は、裾張りを十分に開放して通気を良くすることが重要です。

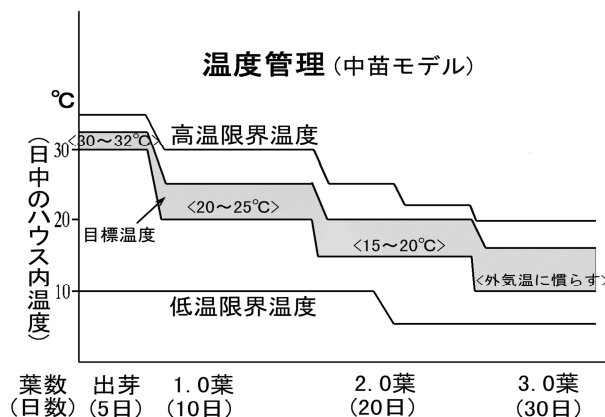


図2 育苗期間の温度管理(中苗)

3 田植えは適期に、温暖な日に実施しましょう

極端な早植えや遅植えは、その後の気象経過の影響を受けやすいため、適期に移植することが重要です。高温登熟の影響を軽減するとともに、田植え後の低温による初期生育の遅延を防ぐため、移植は5月20日～25日頃(あきたこまち、中苗)を目安とします。

移植適温は、日平均気温が稚苗で13℃以上、中苗が14℃以上です。可能な限り、最高気温が20℃以上の日に行い、最高気温が15℃以下の日や強風の日には作業を見合わせます。

4 田植え後は、水管理で生育促進

苗は通常、4～5日で活着しますが、気温・水温とも高いほど活着は早くなります。活着するまでは、保温効果を高めるため水深を4cm程度とします。活着が確認された後は、日照の多い日や温暖な日は浅水で水温・地温を高め、分けつの発生を促進します。

5 病害虫防除は適切に実施しましょう

①いもち病

余り苗は、葉いもちの伝染源になりやすいため、不要になったら、直ちに水田内の泥に埋めて確実に処分してください。

②ばか苗病

発病苗が確認されたら、田植え前までに抜き取ってください。

③もみ枯細菌病

近年、もみ枯細菌病が散見されます。本病は新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色となり、次第に腐敗枯死します。発病苗の新葉を引き抜くと基部から容易に抜けます。発病しても薬剤による防除方法はないため、罹病苗は移植しないでください。

育苗期間の高温と過剰かん水は発病を助長するため注意しましょう。



写真 もみ枯細菌病発病苗

④斑点米カメムシ類

本県の主要種であるアカスジカスミカメは、ノビエやカヤツリグサ科雑草(ホタルイ類)の穂に産卵するため、これらの雑草が水田内に繁茂すると多発し、斑点米の被害が増加します。

斑点米防止対策としては畦畔等の草刈り管理と併せて、水田内雑草の防除を徹底することが重要です。除草剤の効果を十分に発揮させるポイントとして、①あぜ塗り等による漏水対策を確実に、②除草剤散布時の水深は田面の高いところでも5cmを確保する、③除草剤散布後一週間は湛水状態を保つ等の対策を徹底しましょう。

6 農薬の飛散(ドリフト)に注意！

農薬の飛散による危害防止のため、次の点に注意しましょう。

- ①周辺の住宅地や農作物に配慮し、風がないまたは弱い時に散布しましょう。
- ②散布位置や散布方向に他の農作物等がないことを確認したうえで散布しましょう。
散布に当たっては、適切なノズルと圧力で行いましょう。
- ③農薬散布の内容を記録しましょう。

～4月20日から5月31日は「春の農作業安全運動月間」です～
春の農繁期となる4～6月にかけて、農作業死亡事故が多発しています。
農業者の皆様は、農作業機械の運転・操作の際には農作業事故の未然防止と安全対策の徹底をお願いします。

◇次号は6月13日頃の予定です。